

資料紹介『フローラの娘たち』

新妻昭夫(人間社会学部人間環境学科)

私の関心は英国における園芸文化の歴史にある。できれば人間と自然(動植物など)との関係のありかたの変化のなかに園芸文化史を位置づけたいと考えている。いまだ着手したばかりだが、産業革命以降の19世紀中頃から20世紀初頭については、本号掲載のプロジェクト報告¹および前号掲載の研究報告²として、粗雑ではあるが素描を報告したので参照していただきたい。ここで紹介するのはその直前、すなわち産業革命の時代(18世紀後半から19世紀前半)における植物学についての研究書であり、園芸文化史と深く関係するだろうと考えている。この時期はまた啓蒙主義の時代の後半にあたる。

この本のタイトルを直訳すれば、アン・B・シュタイアー『女性を育成する、科学を育成する：フローラの娘たちと1760-1860年のイングランドにおける植物学』(1996年)³。以下では『フローラの娘たち』と略記する。

『フローラの娘たち』の特筆すべき点は、なにをおいても女性学の立場から書かれていることである。著者(Ann B. Shteir: 1941-)の経歴・業績は未調査だが、本書にある著者紹介によれば、英国ヨーク大学の人文学準教授であり、また女性研究の大学院課程の教務部長でもある(もちろん10年前の時点において)。巻末の参考文献リストから判断するかぎり、おそらく本書が最初のまとまった著書と思われる。

扱われている時代は、副題のように「1760年から1860年」と限定されている。著者によれば1860年は時代の転換点であり、リンネの分類体系が英国に紹介され植物学への関心が急速に高まったという。スウェーデンの

博物学者による分類体系「二名法」は、一般には1758年の『自然の体系(第10版)』(動物界、植物界、鉱物界の三界をあつかい、国際動物命名規約の基準とされている)で確立されたとされる。また1753年の『植物の種』で、雌蕊と雄蕊の数による「雌雄蕊分類法」、いわゆる「性体系」が提唱された。

また1860年については、著者は1830年代からはじまる植物学の近代化の完成をこの時期に見ているが、私の関心からいえば、ダーウィン『種の起原』(1859年)に集約される大きな時代の転換点にあたる。また私のもうひとつの関心からいえば、本号掲載のプロジェクト報告⁴で紹介したヘルムレイヒの著書⁵の副題にある時代(1870-1914年)の開始年とほぼ符合することが興味をそそる。『フローラの娘たち』の主題のひとつは「植物学の近代化とその脱女性化」だが、その完成と同時に「家庭園芸文化(ガーデニング文化)」の流行がはじまったと考えられるからである。

『フローラの娘たち』は8章から構成され、その前後に「プロローグ」と「エピローグ」が付されている。以下、目次⁶にそって内容を紹介しよう。

プロローグ「植物学的な会話」

プロローグは本書の全体を概観するものになっているので、すこし詳しく紹介するとともに、著者の議論のスタイルを真似て私なりの考えもあわせて述べておく。プロローグの冒頭に引用されている「植物学的な会話(ボタニカル・カンヴァセーション)」と、この引用についての私の分析を読めば、本書の内容と議論の雰囲気がよく理解できるだろう。いうまでもなく著者自身もそれをねらってこの引用を冒頭にもってきたのだろう。「植物学的な会話」とはどんなものか、以下は引用の全文である。

インゲアナ：まあ、スノードロップがまだとってもきれい。遅霜があったし、雪も深いのに、花の色の白さをたがいに競いあっているみたいだわ。

フローラ：そう、雪がスノードロップの美しさと寿命を長持ちさせたのよ。雪がなかったら、厳しい気候の犠牲になって枯れてしまったにちが

いないわね。

インゲアナ：この花の質素で無垢なところが、とてもすてき！ この花はたしか、リンネの分類体系の第六綱のヘクサンドリア (Hexandria) 綱、植物学会でいう「六雄」綱に属していて、この綱の第一目だったはず。でも、花がふたつ、大きな花のなかに小さな花があるように見えるわ。

フローラ：そう見えるけど、全体でひとつの花なの。あなたが小さな花だと思ったこの部分は、不朽の誉れ高いリンネの機知に富んだ翻訳者によって、蜜腺と英訳されているのよ。まったくそのとおりの名前ね。ハナバチが飛びまわる季節なら、そこから蜜を吸っているのが見られたでしょう。

インゲアナ：以前からきれいだと思っていたのだけれど、この蜜腺の短い花弁のひとつひとつに、緑色の筋があるのよ。数は八本あって、顕微鏡で拡大して見ると、[板ガラスの]溝彫りの作品のようで……あら残念、誰かが呼んでいるわ。

この引用から、いくつものことが見えてくる。著者の議論を参考にしつつ、私なりに分析してみよう。出典は「ニュー・レディーズ・マガジン、あるいは美しき性のための上品で楽しい手引き」誌 (1786年5月号) である⁷。名前からみて女性誌にまちがいはなく、おそらく中流以上の階級向け、というより上流階級向けであろう⁸。会話の内容から、インゲアナは若い女性、フローラはその家庭教師と考えられる。

スノードロップの「質素で無垢なところが、とてもすてき！」と「女らしさ」の価値観が強調されていながら、唐突に (今日から見れば)、リンネの分類体系という科学的な話がつづくところに、当時の社会における女性の位置づけと女性と植物学との特別な関係がはっきりとあらわれている。二人の会話は、インゲアナが顕微鏡で観察した自分の研究結果を話題にしようとしたところで、誰かの呼び声で中断される。おそらく家庭での仕事に呼びもどされたのだろうと著者は指摘する。したがって場所は自宅の庭だと考えられるが、話題はガーデニングではなく、植物学でありリンネの分類体

系である。

今日の私たちから見れば、若い女性が家庭で顕微鏡を使って植物を研究しているというのは、研究者をめざす大学院生をべつにすれば、かなり「変わった女の子」であり「虫愛ずる姫君」に比較されるだろう。しかし、当時のごくふつうのことだったらしい。著者によれば、啓蒙主義に時代には科学を学ぶことはごく一般的な上品な教養であり、とくに女性たちは科学的な知識の消費者として教化されていたという。科学が軽薄さの解毒剤、トランプなど危険な遊びの代替になると考えられ、科学を学んだ女性は会話が上手になり、またよき母親となるとされていた。当時における「良妻賢母」といっていいだろう。

また家庭教師の名前フローラは、「植物相」という意味も暗示されているのだろうが、ローマ神話の花と春の女神でもある。この名前について著者は、花と庭を女性や自然と結びつけ、また女らしさ、しとやかさや無垢と結びつけるこの時代の伝統的な連想と共鳴していると指摘する。そこで科学の他の分野以上に植物学が女性たちに奨励されたし、女性たちも積極的に植物学を学ぼうとしていたのだという。植物を分類し花を顕微鏡で観察することが、彼女たちにとっては、今日の私たちが考える「科学」とはかなりことなる側面をあわせ持っていたのである。

今日から見てもう一点、奇妙に思えることは、このフローラの娘たちが研究した植物学の中心がリンネの分類体系だということ。彼の分類は「性体系」とも呼ばれる雌蕊と雄蕊の本数を基準にしたもので、それを一般向けに紹介した本、たとえばエラスムス・ダーウィン（進化論のダーウィンの祖父）の『植物学の園 (The Botanic Garden)』（1791年）は邦訳もあるが、フローラよりエロスのほうが似合う雰囲気である。たとえば「ひとつのベッドに二人の花嫁と八人の花婿」といったあけすけな表現にあふれ、花嫁は雌蕊、花婿は雄蕊のことだとわかっているにもかかわらず、すくなくとも私は通勤電車で読む勇気をもたない。「無垢」や「貞淑」といった価値観にしばられていたはずの当時の女性たちは、どんな顔をしてリンネの性体系を語っていたのだろうか。またそのそばにいた男性たちは、淑女たちが口にする「はした

ない言葉」をどのような顔で聞いていたのだろうか。

いずれにせよ、啓蒙主義時代における教養としての科学の流行は、理科離れが叫ばれる今日の状況にとって参考になる点があるかもしれない。またそれ以上に興味深いのは、花の美しさや身近さのゆえであれ、あるいはフローラという言葉の文化的な含意のためであれ、植物学という科学が、男性ではなく女性の領域と見なされていたことである。

第1章から第8章の構成と内容

第1章では、植物学を18世紀のイングランドの文化的な特徴のひとつと見なし、その見取り図がしめされる。内容のほとんどは当時の植物学関連本の紹介だが、本や雑誌という印刷媒体によって植物学がさまざまな読者層に奨励されていたからである。他の媒体はもちろんないし、大学や学会というアカデミズムはいまだ未発達な時代である。

当時の植物学の基本は、先にも述べたようリンネの分類体系であり、一般読者に紹介されたのは1760年に出た啓蒙書⁹が最初だったようだ。リンネの体系は花の「雄性」生殖器官と「雌性」生殖器官にもとづいていたので、植物学をまなぶ人々の前に性的な話題が提供されたことになる。したがってこの問題には、女性、ジェンダー、セクシャリティーおよび政治に関する文化的な緊張が数多くまとわりつき、いうまでもなく、この点を著者はもっとも強調している。

当時の植物学は女性の領分と見なされ、その状況は植物学が近代化されると同時に「脱女性化」される1830年代までつづく。1830年以前の女性と植物学の関係が、次章以下で詳しく分析される。

第2章では、18世紀に植物学に積極的にかかわった女性たちが紹介される。それ以前の時代には、女性たちは家庭医療用の薬草の伝統のなかで植物をあつかってきた。しかし18世紀に入ると、この植物との親しさが植物画など新しい上品な文化に取って代わられることになった。富裕階級の女性のなかには、趣味が高じて採集した植物を学者に提供するものや、逆にパトロンとして採集を援助するものもいた。学者の父親を手伝って植

物学を本格的に研究したり、そういう恵まれた状況になくともラテン語を学びリンネその人と文通したりする女性もいた。なかでも注目すべきは、自分の職業に植物学の知識を生かす女性があらわれたことである。たとえば絹織物デザイナーのアンナ・ガースウェイト (Anna Maria Garthwaite: 1690-1763) は、作品に植物学的な自然主義を取り入れ、貴族階級のダマスク織りのガウンに「根の生えた植物」を織り込んだ。

第3章と第4章では、植物学によって社会的に自立することができた女性たちが紹介される (著者は「植物学がジェンダー経済学の一部となった」と表現する)。植物学の本の著者となった女性たちであり、とくに1790年から1830年にかけて目立ったという。女性が植物学本の読者となるだけでなく、書き手としての役割を期待されたのには理由があった。当時の社会的な規範が女性たちに、家庭内での子どもの教育者としての母親という役割を強く求めたからである。庭などで子どもに植物のことを教えるための本の著者としては、男性よりも女性が向いている。若い女性や母親用の本だけでなく、子どもたちに植物学に関心を持たせる児童書や絵本も、これらの女性たちによってさかんに書かれた。

第4章では、若い女性が読むべき本に広く採用された「親しみやすい形式 (familiar format)」、すなわち会話や書簡という叙述スタイルが分析され議論される。プロローグの紹介で引用した「インゲアナとフローラ」の会話を見れば、どのような叙述スタイルかは一目瞭然だろう。この叙述スタイルもまた、当時の社会と家庭における女性の位置づけ、すなわち当時における「良妻賢母」というジェンダー・イデオロギーと無縁ではなく、また参考にしやすく「実行可能なモデル」を提供したという点も見逃せない。

いずれにせよ、裕福とはいえない階級出身の女性たちにも植物学の本の執筆という経済的な自立の道が開けたことは特筆していいだろう。紹介されている主要な女性文筆家の名前を列挙すると、以下のとおり。フランシス・ローデン (Frances Arabella Rowden: 19世紀はじめに活躍)、シャーロット・マレー嬢 (Lady Charlotte Murray: 1754-1808)、シャーロット・スミス (Charlotte Smith: 1749-1806)、ヘンリエッタ・モリアーティ (Henrietta Maria

Moriarty: 1803-13 に活躍)、サラ・ホアレ (Sarah Hoare: 1767-1855)、プリシラ・ウェイクフィールド (Priscilla Wakefield: 1751-1832)、サラ・フィットン (Sarah fitton: ca. 1795-1870)、ハリエット・ビューフォート (Harriet [Henrietta] Beaufort: 1778-1865)、メアリー・ロバーツ (Mary Roberts: 1788-1864)、ジェーン・マーセット (Jane Marcet: 1769-1858)。

第5章は、18世紀から19世紀への変わり目のころに活躍した三人の植物学著述家にあてられている。マリア・ジャクソン (Maria Elizabeth Jacson: 1755-1819)、アグネス・イベットソン (Agnes Ibbetson: 1757-1823)、エリザベス・ケント (Elizabeth Kent: 1820-30年代に活躍)である。著者はこの三人を『フローラの娘たち』の中心に据えている。その理由は、女性、ジェンダー、科学についての信念という変化しつつあった制限要因の範囲内で仕事をし、それぞれになんらかの貢献をなそうと努力し、そして三人ともが植物学を生活の糧とした、つまり三人それぞれに植物学著述を「職業〔キャリア〕」にできたといえるからである。

時代は啓蒙主義からリンネの時代を経て、ロマン主義の時代にいたる。三人のキャリアの制限要因のひとつに、「ブルー・ソックス」と指差されることへの恐怖が見え隠れするのは興味深い。それでも、たとえばエリザベス・ケントが二冊の本を出した後、不遇な境遇に陥っていくのを見るのは、時代の変化とはいえ心痛む。

第6章は『フローラの娘たち』のハイライトである。植物学は、科学の他の分野と同様に次第に近代化していくが、英国における近代植物学の出発点を著者はロンドン大学の初代植物学教授ジョン・リンドリー (John Lindley: 1799-1865) の就任講演 (1829年4月30日)¹⁰に見る。この講演のなかでリンドリーは、「上品な植物学」すなわち「ご婦人たちの娯楽」と「科学としての植物学」すなわち「物事を真剣に考える男性の職業」とを明確に区別した。リンドリーがどこまで意識していたかはさておき、植物学の近代化すなわち植物学の脱女性化ということであり、また女性たちの家庭への囲い込みが強化されることになった。いうまでもなく、植物学を女性の領域と見なす伝統があったからこそ近代化に脱女性化が必要だったのであ

り、科学の他の分野の近代化ではこのような問題は生じなかつただろう。

第7章と第8章では、1830年から1860年という科学についての考えかたが流動的だった時代が検討される。第7章では画家、採集家、旅行家について、第8章では印刷文化すなわち雑誌や本の世界で活躍した女性たちが扱われている。この時代の女性の植物学の特色として、次第に「女らしさ」が強調されていくことを指摘しないわけにいかない。たとえばフランスから輸入された「花言葉」が英国の伝統として成立するのはこの時期である。ただし、この時代で特筆すべきもう一点として、著者は簡単に触れるにとどまっているのだが、ロンドン植物学会が当時においては例外的に多数の女性会員を認めていたことがある(初期には会員の一割が女性)。

第7章には、1840年代の「シダ熱」と呼ばれるブームのなかで活躍した採集家や、次第に盛んになっていく旅行熱の先駆け的な女性たちが登場する。旅行家のなかでは、マリアン・ノース (Marian North: 1830-90) が、私の個人的な好みではある。彼女が世界各地で描いた膨大な点数の絵は、キューの王立植物園内の展示館で手軽に鑑賞することができる。この章にもっとも数多く登場するのが植物画家であることは注目に値する。植物学者の父親や兄の助手というより共同研究者として活躍した女性もいれば、中産階級の出身で才能(感性と技術)を開花させた女性も多い。

女性の画家としての活躍を考えると、19世紀はじめの福音主義的な運動が宗教上の信仰と実践を家庭生活や家族と結びつけ、そのことが「男らしさ」と「女らしさ」の枠組みを強化したことを考えないわけにいかないだろう。たとえば匿名で1837年に刊行された『若い淑女のための植物学』に次のような言葉がある。「美しき性〔女性〕の精神的な構造が、自然と芸術のうちの繊細で、愛らしく、美しいものにならなんにでも、とくに感受性が強いようにできているということは、反駁しえないことだと私たちは考えます。ですから、植物学が他のいかなる科学よりも女性たちの関心と研究をひきつけることに、私たちは驚くことはありません」。余談を承知で書き添えておけば、男性のなかにも「愛らしく、美しいもの」に敏感な人はいるし、女性のなかにも鈍感な人はいる！

第8章では、植物学が脱女性化された後のヴィクトリア朝初期にも、植物学が女性の書き手たちの題材でありつづけ、子どもや女性向け、また一般読者向けに多数の本が書かれたことがあきらかにされる。この章に登場する主要な女性文筆家たちを列挙すれば、パーキンス夫人 (Mrs. E. E. Perkins: 1830年代に活躍)、アンネ・プラット (Anne Pratt: 1806-93)、アンナ・マリア・ハッセイ (Anna Maria Hussey: 1805-77?)、メアリー・カービー (Mary Kirby: 1817-93)、ジェーン・ラウドン (Jane Loudon: 1807-58)¹¹、リディア・ベッカー (Lydia Ernestine Becker: 1827-90)。

しかし大きな変化が、この時代にはあった。教育制度の確立にともなう教科書の変化である。それにともなって、家庭内での母親と子どもの会話といった叙述スタイル (先に述べた「familiar format」) が、近代的科学書の標準形式である「非人格的」すなわち「客観的」な解説に取って代わられたのである。近代的な科学書の標準形式が確立されたと同時に、『種の起原』(1859年)が書かれたという歴史的な符合に、私としては格別な驚きをおぼえる。

エピローグ「フローラ・フェミニスティカ」

エピローグの内容の紹介は、プロローグの場合と同じように、冒頭の部分を引用するのがもっともわかりやすいだろう。

1896年12月3日、菌類学の先駆的研究者の一人であり、後にピーター・ラビット物語の作者となったビアトリクス・ポッター (Beatrix Potter: 1866-1943) は、キュー王立植物園の園長ウィリアム・T・ティセルトン＝ダイヤーの研究室の外に腰をかけ、入室許可がでるのを待っていた。彼女はキノコの一つの胞子を芽生えさせることに成功し、胞子の発芽についての報告をたずさえていた。その6ヶ月前、著名な化学者である伯父のヘンリー・ロスコー卿といっしょに訪ね、キノコの線描画を見せたときには、その園長は「気に入ってくださり、ちょっと驚いていたように見え」た。いま、キューへ一人でやってきた彼女は、窓越しにティセルトン＝ダイヤー

の姿が見えていたが、そうこうするうち「恥ずかしさに襲われ」、「外に飛び出し」た。彼女は日記にこれらのことすべてを暗号で記録し、そして「池の氷が半分溶け、すごい泥」だったと書き添えた。次に訪問したときには、テイセルトン＝ダイヤーは彼女を慇懃無礼な態度で追い返した——彼女の日記には「きっと女嫌いかなにかなのかもしれない」と書かれている。

ポッターは翌1897年4月1日、リンネ協会の例会で論文「Agaricineae〔ハラタケ類〕の胞子の発芽について」(著者名はMiss Helen B. Potter)を発表した。ただし代理人による「紹介」であり、おそらく題名だけが紹介された。リンネ協会で発表された論文は刊行物に掲載されるのが一般的だったが、ポッターの論文が印刷されることはなかった。格式高いリンネ協会は、女性会員を1904年まで認めていなかった。

18世紀には女性の領域だった植物学だが、1830年代にはじまる近代植物学がその世紀末にはポッターを慇懃無礼に追い返すほどに男権主義化していたわけである。しかし、科学としての植物学の脱女性化は、本来は科学としての中性化を意味していたはずであり、そうであるなら女性も男性も平等に科学に接近できるはずである。

たとえば、初代植物学教授リンドリーが1829年に植物学の近代化＝脱女性化を宣言したロンドン大学では、1879年から1911年までのあいだに600人を越える女性たちが理学士(B. Sc.)を授与された(ポッターの伯父のロスコー卿はロンドン大学副学長だった)。ロンドン大学(ユニヴァーシティー・カレッジ)で講義を担当した女性もいる。古植物学者のマリー・カーミカエル・ストープス(Marie Carmichael Stopes: 1880-1958)である。彼女は同大学で植物学と地質学のふたつの優等成績をあげて理学士の学位を授与された後、ドイツで博士号のための研究をつづけ、マンチェスター大学の植物学の準講師と実験助手をへて、ロンドン大学に戻ってきた。

ストープスは、ソテツなど化石植物について数多くの専門的な論文とモノグラフを書くと同時に、初級の科学書や一般向けの本も書いた。その点ではストープスは一八世紀後半以来の、少年少女のために書き科学の入り

口にいる読者向けの解説スタイルを創出した女性たちの歴史に属してもいた、と著者は指摘する。ちなみにストープスは性教育の先駆者でもあり、産児制限の唱道者として歴史に名を残している。

『フローラの娘たち』は、1830年代以降の植物学の近代化と脱女性化に収斂するように構成されてはいるが、著者のねらいはむしろ18世紀の女性の領域だった「植物学的な会話」の見直しにあるように思われる。

著者はエピローグの末尾で、啓蒙の時代には科学教育はウェイクフィールドたちが「精神的な向上〔メンタル・インプルーヴメント〕」と呼んでいたものについての信念と結びつけられ、科学と倫理は連結していたこと、女性の書き手たちが科学と芸術、専門家の知識と一般の知識、専門書と通俗書を、はっきりとは区別していなかったことを強調する。そして、「自然科学と人文科学というふたつの文化のあいだの衝突」が深刻な今日、「フローラとインゲアナの会話」、そして私たちの自然と科学についての、女性とジェンダーについての会話が、これまでになく重要となっていると締めくくっている。

この点について、私は著者の意見に賛成ではあるが、不満もある。近代植物学から排除され家庭に囲い込まれた女性たちが、その後も独特なスタイルで「女性的な植物学」を展開してきたのではと考えるからである。すなわち、家庭園芸やガーデニング、あるいは食卓に花を飾ることが盛んになったのは、まさに植物学の近代化が確立した19世紀半ばからではないのか。

本誌前号の研究報告¹²で指摘したように、ロンドンの街角に花屋が出現したのは1860年前後であり、「フラワー・アレンジメント」の最初の本が出たのは1862年である。また本号のプロジェクト報告¹³で紹介した英国の「ナショナル・アイデンティティー」の拠り所としてのガーデニング文化の成立が1870年から1914年であったこと、その最終的な立役者の一人が女性画家ガートルート・ジキル(ジェキル)であったことは、時代的にも、また植物学や花の女性性という意味でも、本書『フローラの娘たち』の議論と無関係ではないだろう。

いずれにせよ『フローラの娘たち』は植物学だけでなく園芸文化の歴史にも女性学という新しい視点を提供するものであり、浅学な私は他に類書を知らない。

(Endnotes)

- 1 新妻昭夫 (2005 年)「19 世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」、『園芸文化』第 2 号：113～117 ページ。
- 2 新妻昭夫 (2004 年)「19 世紀前半における植物学の近代化と女性の囲い込み——ラウドン夫妻を事例として」、『園芸文化』第 1 号：80～87 ページ。
- 3 Ann B. Shteir, 1996. "Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760 to 1860", The John Hopkins University Press.
- 4 上記の注 1 参照。
- 5 Helmreich, A., 2002. The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914. Cambridge Univ. Press.
- 6 「目次」を直訳すると、以下のとおり。

謝 辞	p. ix
エピローグ 植物学的な会話	p.001
第 1 章 植物学の知識が全土にひろまる 1760～1830 年	p.009
第 2 章 植物学という上品な文化における女性	p.033
薬草という伝統	p.037
植物学的な美術と図案	p.039
パトロンと採集人	p.047
リンネの娘たち	p.050
第 3 章 リンネの時代の書き手としてのフローラの娘たち	p.059
母なるミモザ：フランシス・ローデン	p.062
シャーロット・マレー嬢	p.067
趣味と実益のための植物学：シャーロット・スミス	p.068
ヘンリエッタ・モリアーティ	p.073

	実用性を説く：サラ・ホアレ ……………	p.074
第4章	植物学的な対話：親しみやすい形式 (familiar format) の 文化政治学 ……………	p.079
	プリシラ・ウェイクフィールド ……………	p.083
	サラ・フィットン ……………	p.089
	ハリエット・ビューフォート ……………	p.093
	メアリー・ロバーツ ……………	p.095
	ジェーン・マーセット ……………	p.099
第5章	植物学物の三人の「職業婦人」 ……………	p.105
	マリア・エリザベス・ジャクソンと啓蒙植物学 ……………	p.108
	「科学の愛のために」：アグネス・イベットソン ……………	p.120
	ロマン派のフローラ：エリザベス・ケント ……………	p.135
第6章	科学として芽生えつつあった植物学の脱女性化、 1830～60年 ……………	p.147
	ジョン・リンドリーと「近代植物学」 ……………	p.153
	変化する自然描写 ……………	p.158
第7章	ヴィクトリア朝のブラックファースト・ルームにおける 女性と植物学 ……………	p.171
	画家たち ……………	p.178
	採集家たちと文通家たち ……………	p.182
	植民地旅行家たち ……………	p.191
第8章	印刷文化のなかのフローラの娘たち、1830～60年 ……………	p.195
	植物学〔から性〕を添削する：E・E・パーキンス夫人 ……	p.200
	「大衆向けの効用と一般の利益のために」： アンネ・プラット ……………	p.202
	絵解き植物誌：アンナ・マリア・ハッセイ ……………	p.208
	レスターシャーのフローラの無会話： メアリー・カービー ……………	p.216
	女性のための植物学か近代植物学か？	

	ジェーン・ラウドン・	p.220
	フェミニストのフローラ：リディア・ベッカー	p.227
エピローグ	
	フローラ・フェミニスティカ	p.233
注記		p.239
文献		p.271
索引		p.293

7 *New Lady's Magazine, or Polite and Entertaining Companion for the Fair Sex.*
May 1786. p. 177.

8 雑誌や本は当時はかなり高価だった。印刷技術が十分に発達していず、また印刷物はぜいたく品として高い税金がかけられていたからである。雑誌など印刷物が廉価になったのは1840年前後から（拙著『種の起原をもとめて』朝日新聞社、ちくま学芸文庫の第2章、とくに「アマチュア向け博物学雑誌」を参照）。また時代は産業革命の前半であり、いわゆる「中産階級」はまだ出現していなかっただろう。

9 James Lee, 1760. *Introduction to Botany: Extracted from the Works of Dr. Linnaeus.* その後も類似の本が何冊もあり、先に述べたエラスマス・ダーウインの本もその一冊だった（Erasmus Darwin, 1791. *The Botanic Garden. Parts 1 & 2.*）。もっとも有名なのは、ソントンの『リンネの性体系の新図解』（Robert John Thornton, 1799. *New Illustration of the Sexual System of Carolus von Linnaeus.*）。

10 この講演の全文は、次の論集に第Ⅱ部（73～88ページ）として収録されている。Stearn, W. T. (ed.), 1999. *John Lindley 1799-1865: Gardener-Botanist and Pioneer Orchidologist. Bicentenary Celebration Volume.* Antique Collectors' Club in Association with the Royal Horticultural Society.

11 上記の注2の研究報告の副題にある「ラウドン夫妻」の妻のことである。

12 上記の注2参照。

13 上記の注1参照。